



地方独立行政法人 青森県産業技術センター  
**林業研究所**

 **青森産技**   
<https://www.aomori-itc.or.jp/>  
あおもりの未来、技術でサポート

## 経営資源からみた林業研究所

### 一 はじめに

四月三日に着任し最初の打合せで、「林業会報に掲載をお願いしている林業研究所広報、六月号原稿は所長の担当です。」と言われ、「えー!」。

平成六年に県へ入庁し、林政課、団体経営改善課、東青地域県民局等で勤務し、研究業務は一度も担当したことがない私を書けば良いのか。

研究といえば、休日に試行錯誤している調査・研究もどきの取組(図1)と、身内(某県高専元教授・理学博士の叔父、弁護士の子、大学院・スウェーデン留学の娘)からの情報のみです。

叔父からは、研究関連の外部資金を獲得してこそ一人前の研究者だと教えられ、娘からは、研究にはお金が掛かるということを実感させられました。

娘は複数の団体から留学資金の支援を受け、また学会や修士論文等の受賞で大学院二年分の奨学金返済が免除されるなど、様々な外部資金があることを認識させられました。

いずれも資金(カネ)に関係するものというところで、少し強引ですが、研究所運営に必要な要素である、経営資源(ヒト、モノ、カネ、情報)からみた林業研究所について、御紹介するにとします。

### 二 ヒトリソース

林業研究所の組織は森林資源部と森林環境部があり、研究の根幹となるヒトは十一名(図2)。産技センター内

の十三ある研究所の中でも規模の小さな組織ですが、少数精鋭で日々研究等に邁進しています。

今年度、約十年ぶりにプロパー職員の採用(図3)があり少し若返りしましたが、平均年齢は四十九・五歳。スギ人工林と同様に円熟の十齡級で、主伐(退職)、再造林(採用)の研究循環サイクルの構築が課題となっています。

いま経営の世界では、人材に投資し企業価値の向上につなげる「人的資本経営」が注目されていると聞きます。

そこで、研究所の価値向上に向けて、三十〜五十代の中堅・ベテランの研究員については、外部研修等へ積極的に参加させるなどスキルアップを促し、新採用者については、研究の進め方など丁寧なOJTのほか、林政課の各種研修や青い森林業アカデミーの部分聴講などで、現場実態を踏まえ、自律性を持って試験・研究を行えるよう育成していくこととしています。

ちなみに、県や産技センターでは「人材」ではなく、「人は宝」という考えで「人材」という言葉を使いません。人を大事にしない組織には、成長や発展はないということを心掛けて、人材育成に取り組んでいきたいと思えます。

### 三 モノリソース

林業研究所の所有するモノは、土地や建物等の固定資産と、毎年供給しているスギ・ヒバ等の種子や青森さくら



図1 休日に試行錯誤している取組

休日に、自分の山や畑で、仕事に繋がるような様々な作業を実施。繊細・緻密なことは苦手で、すべてが大雑把(適当)。チェーンソーや刈払機での事故がないように、注意しながら作業しています。(一部を写真で紹介)

※ヒバ、ヒノキ・・・種からコンテナ苗を作りました

(>\_<)下刈りが大変(>\_<)



【ヒバ (H27植栽)】



【ヒノキ (H28植栽)】



【カラマツ (H31植栽)】



【チェーンソーで製材&皮剥】



【行者ニンニク】



【山椒】



【ポポー (温帯果樹)  
10年目で初収穫】



【クリスマスローズ  
コンテナで200本超の苗作り】



【カタクリの里作り (H27~)】



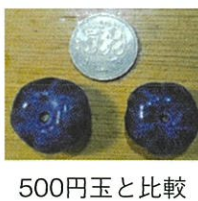
【クマガイソウ&エビネ】



【菓子クルミ】



【ブルーベリー約15品種】



500円玉と比較



【キウイ4品種】



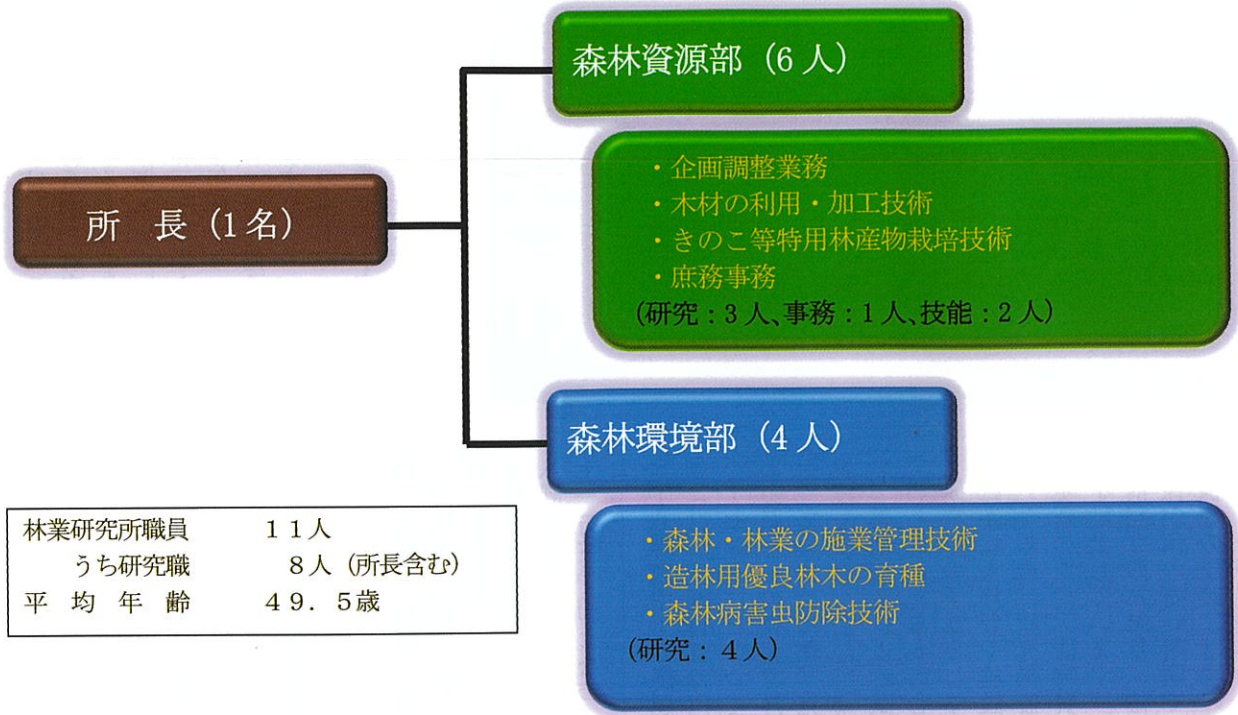
【アケビ3系統】



【桃・梨など約15種】




図2 林業研究所の組織



林業研究所職員	11人
うち研究職	8人 (所長含む)
平均年齢	49.5歳

図3 新採用職員を紹介します

研究員 おの 小野寺 杏仁さん (札幌市出身)



所属 林業研究所森林資源部

担当業務 きのこの品種育成と栽培技術に関すること

得意分野 菌学、微生物学、料理

抱負 青森県で大学と大学院時代を過ごし、自然や人柄、地域性に魅力を感じた青森県の産業を支える仕事ができることを嬉しく思っております。大学・大学院では白神山地の世界遺産登録地域から3キロメートルほどの西目屋村にある自然観察園で新種のきのこの研究をしていました。学んだ知識や経験を存分に生かして、担当業務であるきのこに関する研究に邁進してまいります。対して、森林・林業や木材の分野に関しては専門外のため、現在勉強中ですが早く一人前になり、お世話になった県と県民の方々に貢献できるよう頑張ります。

げの種菌などがあります。固定資産の詳細については林業会報第二百七十三号で紹介していますが、土地は約百九ヘクタール（研究所、実験林、ほ場等）、建物は二十三棟（研究管理棟、木材利用実験棟等）、それに付随する機械設備など、いずれも研究には欠かせない多くの資産を所有・管理しています。

固定資産台帳を見ると、産技センター設立時に県から現物出資又は無償譲渡され、耐用年数を超えて減価償却が終わり、備忘価額一円で登録されているものが数多くあります。

ところで、私は数ヶ月前に変形性股関節症と診断され、今後人工股関節などの手術（大規模修繕）が必要だと言われました。老化で次から次へとガタが来る年頃になってきましたが、建物や機械設備等も同様で、「備忘価額」古いもの」の修繕や更新が、今後の大きな課題となっています。

この中で、平成三十年度にきのこ栽培研究棟と林木育種研究棟を更新・建設しましたが、いつ故障するか分からない機械設備等が続々と控えており、研究が滞ることのないよう計画的な修繕等を産技センター本部と交渉してい



図4 カラマツ採種園造成地



くこととしています。  
種子等については、県内の造林に使用される苗木の約八割が研究所の種子から生産されていると言われていますが、従来からのスギ・ヒバ・クロマツ等に加えて、令和三年度からは無花粉スギを開始し、今年度から（松くい虫被害）抵抗性クロマツの種子を供給することとしています。  
また、カラマツの種子については令和十年度からの供給開始予定としていますが、平成三十年度に造成した採種

園（六・八ヘクタール、図4）が順調に生育しており、少しでも早く供給できるようにしたいと考えています。

青森きくらげの種菌については、令和二年度から始まったきくらげの生産・販売が順調に推移し、研究所が供給可能な種菌数を超えることが想定される状況となっております。今後の対応について林政課と協議しているところで

#### 四 「カネ」ユウジン

今年度の試験・研究課題は、林木育種、森林造成、森林保護、森林資源、木材利用及び特用林産の分野で合計十八課題実施し、予算総額は三千五百四十一万三千元となっています。（表

#### 一）

十八課題中十七課題の財源が県交付金（計三千五百五十万円、総額の九十九パーセント）となっており、出資者である県からの資金で外部資金扱いにはなっていませんが、見方によっては、産技センターの自己収入ではないため、外部資金による試験・研究を行っているといえるかもしれません。

研究所の予算としては、この研究費のほかに人件費や施設管理運営費があり、今年度は研究機器と非常用発電機の更新のため、研究費と同程度度の予算を計上しています。

前記3のとおり、修繕・更新予算の確保が頭の痛い問題で、きのこ栽培研究棟等の建設には国の交付金等を活用しましたが、修繕や単体機器更新には

活用できる交付金等がないため、産技センターの目的積立金の取り崩しや県からの個別の交付金に頼るしかありません。

平成二十八年度にも研究管理棟等の外壁・屋根の修繕・塗装に数千万円要しましたが、産技センター内の各研究所は同じような状況で、林業研究所だけが予算を使うというわけにはいきません。

今後研究を止めないために計画的な修繕・更新が必要な中で、他力本願の外部資金ですが、ふるさと納税のように林業研究所の修繕・更新の使途限定で、何方か寄付していただけないかと妄想している新米所長です。

#### 五 「情報」ユウジン

情報は、ITが発達したことで経営資源としての重要性が高まりましたが、現在は多くの情報が氾濫し取扱いは十分注意する必要があります。

試験・研究に活用する場合も、情報を収集し断片的に捉えるだけではなく、情報の意味を考え、様々な見方・視点（方向性）からアプローチし、一見無関係に見える情報を関連付けるなど、情報を使いこなす能力が必要です。そのためにも、想像力・創造力・発想力が豊かな人財育成が重要だと考えています。

また、これまで多くの先輩たちや現在の研究員が取り組んだ試験・研究成果も重要な情報です。当時の森林所有者や関係機関等から投げかけられた多

様な研究テーマに取り組み、多くの成果を収め、それらを研究所報告として刊行してきました。

成果の一部は、マニュアルや手引きとして林業研究所のホームページに掲載しダウンロードできるほか、研究管理棟内の図書室（図5）には、研究所報告のほか、森林・林業・木材産業に関する多くの蔵書があります。いつでも閲覧可能となっており、活用していただきたいと思えます。

図5 研究管理棟内の図書室





表1 令和5年度試験研究課題の概要と予算額

分野	NO	研究課題名	区分	研究期間	予算額 (千円)	試験研究目的等
林木育種／ 種苗生産	1	林業用優良林木の育種・増産技術に関する試験・研究開発	開発 (県交付金)	H31- R5	735	・健全な森林の造成を図るため、マツ材線虫病抵抗性クロマツの作出、スギ並みに成長するヒバの挿し木優良品種の育成、花粉症対策スギの苗木増産技術等の試験・研究開発を行う。
	2	十和田ほ場管理等育種種子生産事業	支援 (県交付金)	H21- R5	15,861	・優良な林業用種苗を普及するため、林業種苗法に基づく精英樹を主な母樹とした採種園・採種園整備及び造林用の優良種苗の生産配布を行う。
	3	再造林推進種苗生産管理事業	支援 (県交付金)	H31- R5	2,153	・需要の多いカラマツ苗木の生産に向け、カラマツ採種園に植栽した採種木の着実な育成を促すため、保育作業を行う。
森林造成	4	カラマツ人工林の施業技術に関する試験・研究開発	開発 (県交付金)	H31- R5	848	・近年造林需要が高まっているカラマツについて、既存のカラマツ人工林の生育状況及び被害発生状況を調査することによって、立地環境に適合した施業方法を研究し、本県の環境に適した造成技術を開発する。
	5	試験林・検定林等の調査管理及び林業技術指導事業	支援 (県交付金)	S47- R5	1,008	・試験林や検定林等に関する調査・管理、スマート林業関連研究に関する調査・普及、森林環境や林業技術に関する情報収集・技術指導を行う。
森林保護	6	森林の公益的機能を守る病虫害対策技術に関する試験・研究開発	開発 (県交付金)	H31- R5	504	・ナラ枯れ被害などの森林病虫害対策の集中化と効率化のために、被害が発生しやすい地域の抽出やハザードマップなどを作成する。また、病虫害の駆除と木材利用が両立できる技術等の研究を行う。
	7	マツ材線虫病などの森林病虫害発生予察及び防除指導事業	支援 (県交付金)	H31- R5	343	・マツ材線虫病やナラ枯れ、ツキノワグマの剥皮被害など各種森林病虫害に関する被害状況の把握とデータ収集を行い、防除対策の検討・技術指導を行う。
	8	松くい虫被害予防総合対策事業	支援 (県交付金)	H26- R5	717	・松くい虫被害を防止するため、県と連携して加害生物のモニタリングや被害木の診断・調査等を行う。
	9	松くい虫被害緊急対策事業	支援 (県交付金)	R4- R5	2,208	・松くい虫被害発生地域周辺に潜在している恐れがある被害木等を徹底駆除するため、異常木等の被害診断を行う。
	10	ナラ枯れ被害防止対策事業	支援 (県交付金)	H23- R5	1,734	・ナラ枯れ被害を防止するため、加害昆虫であるカシノナガキクイムシの生息状況等の調査を行う。
	11	With / Post ナラ枯れ時代の広葉樹林管理戦略の構築に関する試験・研究開発	公募 (競争資金)	R4-R5	363	(国や他県の研究機関等との共同研究) ・ナラ枯れ被害新規拡大地域での監視と防除による被害対策と、ナラ枯れの発生を前提とした広葉樹資源の活用と循環に資する技術開発を行う。
	12	津軽西海岸の自然を守り育む松くい虫被害対策強化事業	県重点 (県交付金)	R5	700	・松くい虫被害対策を強化するため、県内早生樹の調査及び育苗生産、並びにアシストスーツ着用による省力化・軽労化の検証を行う。
森林資源	13	スマート林業現場実装推進事業	県重点 (県交付金)	R5	2,205	・スマート林業技術を推進するため、モデル地区に選定された森林における各種技術の実証試験を行う。
木材利用	14	生産性を高める製材技術と高付加価値製品に関する試験・研究開発	開発 (県交付金)	H31- R5	705	・増加傾向のある大径材資源を有効に活用するため、丸太段階での材質予測などによる効率化・省エネ・低コストの製材技術の開発や難燃加工などの高性能木製品の試験・研究開発を行う。
特用林産	15	売れる新品種きのこの育種と高付加価値栽培技術に関する試験・研究開発	開発 (県交付金)	H31- R5	504	・成分育種によるシイタケなどきのこの新品種開発及びきのこの有用成分強化栽培技術等の研究を行う。
	16	きのこの種菌供給及び林産物生産技術指導事業	支援 (県交付金)	H31- R5	857	・きのこの種菌の供給及び特用林産物並びに県産材の需要拡大を図るため、県内の生産者等への技術指導を行う。
	17	あおもり産野生きのこ安全性実証事業	支援 (県交付金)	H26- R5	2,500	・出荷制限がかけられている県産野生きのこについて、放射性物質の測定分析等を行い、安全性を統計的に検証するなど、出荷制限解除に向けた調査研究を行う。
	18	青森さくらげ普及事業	支援 (県交付金)	R3-R5	1,468	・青森さくらげの種菌供給に必要な機器の整備や品質向上に向けた栽培・管理技術の調査研究及び生産者指導を行う。
合計					35,413	

開発：産技センターの重点推進事項として重点的に取り組む課題

支援：県の施策への支援や基礎的な内容を行う課題

県重点：県の重点事業に対応する課題

六 おわりに

表1の中で研究期間の終期が令和五年度になっていることにお気づきでしょうか。これは、今年度が第三期中期計画の最終年度(図6)になっていることによるもので、試験・研究が終了するというものではありません。

現在、県では第四期中期目標を検討しており、各研究員は第三期中期計画の総仕上げとして試験・研究に取り組みとともに、中期目標達成に向けた第四期中期計画策定のための課題設定等を検討しているところです。

検討に当たっては、前記2〜5に述べたように限られた経営資源の中で、本県の森林・林業の課題解決に向けて試験・研究課題を選定しており、森林・林業の長期性から継続して実施するものや、時代のニーズに合わせて新たに取組むものもあると思います。

林業研究所としては、産技センターの目的(図7)である「地域産業の活性化を図り、もって青森県における産業の振興及び経済の発展に寄与」するため、着実に取り組んで参りますので、引き続き関係者みなさまの御理解と御協力をお願いいたします。

地方独立行政法人  
青森県産業技術センター  
林業研究所  
所長 逢坂 誠

図6 県と産業技術センターの研究体系の関係

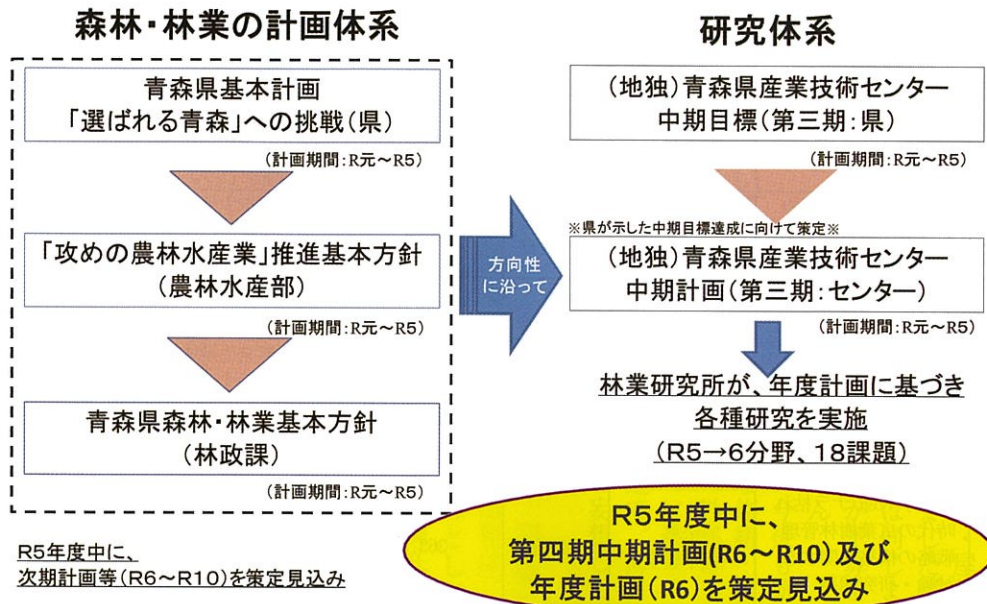


図7 青森県産業技術センターの目的



【目的】

法人は、工業、農林畜産業、水産業及び食品加工(「産業」と総称)に関する試験研究及び調査並びにそれらの成果の普及を行うとともに、産業に関する技術支援を行うことにより、**地域産業の活性化を図り、もって青森県における産業の振興及び経済の発展に寄与**することを目的とする。